

序章  
出会い

2014年初夏の日。黒いアスファルトに日差しが反射してまぶしい。大阪府東部の人びとのおもな移動手段は自転車だ。私は久しぶりに自転車にまたがり、同じく自転車で走る先輩の後を必死についていく。ほぼ座りっぱなしだった大学院生時代を経て足腰が大分弱っていた私は、自分の年齢の割りに体力がなかった。ゼーはー必死に追いつこうとする私の様子を気に留めることなく、自転車をこぎながら、先輩は私に話しかけてくる。先輩にとってはこの自転車のスピードはたいしたものではないようである。

「おおざっぱだけと説明するね」と、先輩。子どもたちは低学年4人で、今日は絵本を読もうと思うんだけど、リナが韓国語のほうを読んでもくれたらいい……そういった内容だったが、距離がかなり開いていてあまりよく聞き取れない。私は、「わかりましたー」とわかっているのに答える。この距離を自転車で毎週走ることかと思うだけで、先が思いやられる気持ち。

放課後に行われる「母国語学級」の活動のために、私たちは東大阪市のある小学校へ向かっていた。講師の報酬には基本的に交通費という福利厚生が存在しない。そのためできるだけ安

価な交通機関か、地域に暮らす人が必然的に講師を担う。どの仕事もそうなのかもしれないが、「母国語学級」の講師も人材不足に悩まされ、毎年人が入れ替わる。私も学期の途中ではあるが、代理講師としてこの年の6月から二つの小学校を担当することになった。

40分ほど自転車で走り続ける。途中、国道と工場地帯を過ぎていく。大きなトラックが往来し、排気ガスで空気が少しよどむ。工場地帯を越え、こじんまりした一軒家が建ち並ぶ住宅街にその目的地はある。学校周辺に電車の駅はない。

東大阪市では「母国語学級」と呼ばれ、広義には「民族学級」と名指されるこの場所での「活動」は、「韓国・朝鮮人」、今日的には「朝鮮半島にルーツのある子どもたち」が、朝鮮半島の言葉や歴史などを学ぶ教育の場だ。「民族学級」という名称は公教育の現場で用いられる正式名称であると同時に、歴史的な名称でもある。社会や子どもたちのあり方とともに、その姿も変化を遂げて来た。私は、民族学級の担当講師、「民族講師」として今、勤務先の小学校に向かっている。

「民族」を教える「講師」ってどんな存在なんだろうか。その責任が、私なんぞに務まるのだろうか。そもそも、「民族性」「民族的」という作られた概念を、子どもたちに伝える今日的な意味とは何だろうか……。韓国での大学院生活を経て頭でっかちに仕上がっていた私は、あれ

これと考え込んでしまい、半ば気持ち後は後ろ向きだった。

初めにはっきりと言っておかなければならない。私は当初、研究を目的に「民族学級」の講師になったのではなかった。

大学院碩士課程（修士課程に該当）2年目が終わろうとする頃、私は未だに研究テーマと対象のフィールドを決めることができていなかった。特段怠けていたわけではなく、むしろどんな学生より必死だったのだが、毎日のコースワークについていくことだけで精一杯だった。日本で生まれ、公教育を卒業した私は韓国語がほとんどできなかった。韓国語を真剣に学び始めてから1年で大韓民国（以下、韓国）の大学院に入学した。さらに学部の時とは専攻の異なる人類学科へ合格できたことは奇跡だった。そのためにどうしてもコースワークをこなすことにほとんど時間を割くことになった。気が付けば、2年があっという間に過ぎようとしていた。成長した実感もなく、強いて言えば日々のレポート作成で韓国語のタイピングだけは異様に早くなっていた。

指導教授である文玉杓先生（ムンヨクピョ）はそんな私を厳しくも穏やかに見守ってくれた。文先生は韓国の文化人類学会を率いてきた人類学者の一人だ。人類学という学問領域において女性として地位を確立することは並大抵の努力ではなかっただろう。息子さんを出産後まだ数ヶ月も経ずに、一人日本の農村調査に向いたエピソードを持つ強くてたくましい女性だ。

研究テーマを決めることができず、ただ焦るばかりの私を、文先生は見かねて助手として調査に連れ出してくれた。場所は京都府、西陣（にしじん）。調査の方法論を、文先生と街を歩く中で学んだ。とにかくまずはフィールドに出ることから始めよ。そして、見えるもの——それは美しくても、汚くても、違和感があっても——そのままに記録せよ。先生は丁寧にまじまじと対象を眺めては何の加工もすることなく写真に収めた。加工は言語道断、ただ現実を記述し、それを解釈とともに残すことが人類学研究者の役割なのだとということ、そしてテーマとの出会いは意図することなく、突然にやって来るのだということを、西陣の街を歩きながら教えてくれた。

テーマはやって来た

たしかにテーマとの出会いは意図せずに来て来た。京都西陣での調査を通して、かつて西陣織の織手（西陣織の「織物」の制作段階に従事する技術者）だったという女性との出会いに私を導いてくれた。幸子さんは在日朝鮮人の父と日本人の母とのダブルというアイデンティティを持つ女性だ。彼女の西陣での経験や葛藤について何うインタビューの中で、幸子さんは「自分の父がどこから来たのか知りたい」と相談してくれた。その時の幸子さんの切迫した表情、願いがこもったまっすぐな眼差しから、私は目をそらすことができなかった。自分の中のどこか

ぼっかりあいた空白と、それを埋め合わせる自分に関わる情報。迫りたくても、探したくても、自分の力ではたどり着けない。誰のせいでもなく、それは植民地経験による移動と別れの歴史がもたらした、人びとの断絶であるように私は感じた。

なぜ、人は自分がどこからやって来たのか辿りたいのだろうか。もしも幸子さんが、韓国にいる親族とつながり直した時、幸子さんとその親族にどのようなことが起こるのだろうか。幸子さんの父親に関する情報と、死亡証明書や戸籍の写しを預かって、私は韓国に戻り、慶尚北道の田舎に向かった。その日はちょうど田植えの季節で、普段はひっそりとしている集落にも、農家を営む人びとの姿が見え忙しそうに作業をしていた。人びとに訪ねながら、なんとか幸子さんのお父さんが昔暮らしたであろう家の位置を見つけ出した。情報が乏しいうえ、すでにお父さんの渡日60年が経過していたので、調査は難航した。あきらめずに周辺の方に聞き込みを続けたところ、隣の村で親戚にあたる人を見つけ出すことができた。

その半年後、幸子さんはその親戚にあたる人と会うこととなった。通訳を挟み、一時間ほどいろいろな話をしたそうだ。その後、幸子さんは、その韓国の親戚の方とは付き合いはないというが、「ぼっかりあいた」胸の中を埋めるものを見つけた幸子さんの表情は、以前とは違ってたんだか達成感に満ちたとても穏やかなものだった。

幸子さんとの出会いから影響を受け、私は在日朝鮮人の家族や親族について学位論文をまと

めてみようと考えた。とりわけ幸子さんのような「つながり直し」を記述してみてもうだろうか。そこで、「韓国」の親族と出会うために、自身の本籍地を尋ねようとする在日同胞の人びとを探したり紹介してもらっては、その人たちに会いに行った。時に通訳などを務めながら、その人びとの「親族探し」の手助けをした。一緒に田舎までバスに乗って、朝鮮半島の南側をうろうろした。旅好きの私には楽しい日々でもあった。親族と感動的な再会をする人もいれば、まったく手がかりすら見つからない場合もあった。幸子さんのように「会うだけで満足」という人や、親族を見つけ出すことができずとも、自身の母親、父親が生まれた場所を訪れることだけで満足そうにされる人たちの姿を見て、親族を探す「行為」それ自体がとても意味のあることだと実感した。

「私のルーツを探したい」と彼ら彼女らは話した。「ルーツ」。単純に訳すなら「根っこ」なんだろうけれど、とても抽象的な言葉で、使い古されている感じがする。彼ら彼女らが探している「ルーツ」とは何だろうか。ただ単純に血縁者を探したいわけではないことが、彼ら彼女らの発する「ルーツ」という言葉から見えてくるのだった。

「ルーツ」というキーワードを抱えたまま韓国での留学生活を終えた私は、論文を提出できずに一度日本に戻った。そんな折に、韓国からの留学帰りで「在日」当事者である私は、「民族講師」の誘いを受けたのだった。

私は当時、「民族学級」について詳しく知らなかったが、大学生の頃に一度見学に連れて行ってもらったことがあった。ある中学校に設置された民族学級の「卒級式」を見学したのだが、その時の感情は鮮明に覚えていて、私はただ「恥ずかしかった」。中学生の子どもたちが自分の発音で想い出をウリマル(우리말/私たちの言葉)韓国・朝鮮語)で話し、周りの先生や友人たちはその様子を暖かく見守っていた。柚子茶が民族学級に在籍する子の友だちらによって振る舞われた。見学当時は、韓国・朝鮮語を一言も話せなかった私。この空間の中にいる自分という存在が、ただただ恥ずかしかった。それと同時に、もしも私が子どもの頃、こんな学びの機会があったならば、ソンセンニム(선생님/先生)のような大人との出会いがあったならば、今の自信のない私とは少し違う姿になっていたのだろうか、と感じたのだった。

民族講師は原則、在日朝鮮人当事者しか務めることはできないのだが、その「当時者性」というのも難しい。私の場合は大人数になって、大学卒業後に半ば急いで「韓国語」を習得したので、人に何かを教えるほどの知識を持ち合わせていなかった。何より私は自分に自信がなかった。自分が何者であるかを表現する言葉を探すために韓国にまで行って文化人類学を専攻したが、学べば学ぶほど余計にそれはわからないものになっていくように感じていた。そんな私に民族学級・母国語学級で用いられる「民族的な」「民族の」といった枕詞はとっても強烈で、それを口にするとなんだか思考が止まってしまいうような感覚を覚えた。

韓国では、海外に暮らすコリアルーツの人びと、つまり「在外同胞」に関する研究や議論が近年とくに活発に行われている。社会科学や人文学研究として多くの研究者が取り組んでいる印象である。やはり大きくは、在外同胞の政治参加が影響しているだろう。そして韓国社会としてもグローバル戦略として在外同胞を人的資源として扱おうとしていることがわかる。10月5日は「世界韓人の日」と制定されたり(二〇〇七年)、在外同胞関係の法的規制緩和(他国の永住権を保持しながら韓国の住民登録が可能になるなど)も2015年以降頻繁に、かつ便宜と利益を最優先に行われている。「同胞である」ということは、かつて韓国内では差別の対象であったというが、多文化な社会包括の動きが進む現代の韓国では、「同胞」という言葉の持つ差別感覚は薄まっているようである。そして過去にほとんどの場で用いられた「僑胞」という単語は、「同胞」が公式的に使用されることからほとんど見られなくなった。

「同胞」に韓国語を教育する機関が国際国語振興院(NIKEED)である。もともとは日本に住む「同胞」のための教育機関だったが、現在は上記のようなグローバル戦略的な意図もあり、コリアに「ルーツ」のある世界中の人びとが奨学金を得ながら韓国語と韓国文化、歴史などを学ぶ。私もこの機関で3ヶ月間の韓国語教育課程を受講した。その場に集まる留学生たちはとても多様で、韓国への認識や関わり方も様々だった。中国やCIS(独立国家共同体、バルト三国を除く旧ソビエト連邦構成国)諸国からのコリアルーツの留学生は、韓国での大学進学やワーキン

グビザ取得のためといった具体的な目標、目的があった。対して、日本からの留学生の多くは「ルーツ探し」「自分探し」のためにやって来たと答え、目標もやばんやりとしていた。大学進学を目的としない限り、ほとんどの学生は課程終了後すぐに日本に戻る予定となっていた。大学かという私もその一人で、韓国語を得ることで何らかの新しい自分との出会いを期待していたような気がする。

日本からの留学生で最もユニークな存在は「オモニ学生」たちである。私の在籍中（2011年）には60代前半の学生が2名いて、中級から上級レベルを学んでいた。彼女たちは、これまでの人生で「言葉」を学べなかったことが一番の心残りだと話してくれた。時代の制約の中で、彼女たちは韓国を訪れることもままならず、言葉に触れることもなかった。韓国を歩くこと、韓国語を学ぶことの意味合いが、日本からの若者や他の国からの留学生とは一味も二味も違っていた。彼女たちは、やる気のない学生には喝を入れることもあり、「あんたらは韓国人なんだから!」と、はつきりと言う場面も見られた。日本以外の国からの学生は、自らのことを「韓国人」だとは思っていない（生まれたと同時に居住国の国籍を取得するから）。日本からの在日学生も、韓国の国籍者は少数で日本国籍者のほうが多かった。しかし、日本で「在日」を生きた彼女たちオモニ学生にとって、コリアルーツがあるということは、「韓国人」であるというナショナルな感覚を当然としていたのである。

ソニア・リャンは在日朝鮮人たちが陥る特殊性について、コリアンアメリカンの場合は居住国の国籍を持ちながらも母国（コリア）とのつながりを維持することが可能だったことに言及しつつ、それに対して在日朝鮮人の場合は故国（くに）と呼ばれる場所は文化的に異邦となり、同時に居住国（くに）と呼ぶべき場所は法的に異邦のままでと言う。そして民族の分断・冷戦・ホスト社会の閉鎖的構造を理由に、在日朝鮮人ディアスポラは帰郷する場所を失い、自身を記憶する歴史はおぼろげで、将来の文化的、法的アイデンティティでさえ約束されない現状だと強調する<sup>1</sup>。在日朝鮮人は植民地宗主国だった日本と、分断されたままの「故国」の間で生きている。移住の歴史がすでに100年が過ぎていくにもかかわらず、未だ自身が何者であるのかというアイデンティティの問いから抜け出すことができずにいる。それが在日朝鮮人という人びとなのである。

母国語学級の教室は小学校の最上階で、一番奥に位置する。週に1日だけ、この教室は子ど

「1」 ソニア・リャン（2005）、20-21頁。なお、リャンは、アメリカ社会が日本よりましだ、といった議論をしているわけではないことを本文内で言及している。